

「大つごもり」成立の背景

—「後の事しりたや」一視点—

木村真佐幸

「大つごもり」は、一葉が大音寺前の生活に終止符を打ち、文字通り背水の陣を敷く思いで転居した丸山福山町での第二作である。しかし第一作の「暗夜」(後に「やみ夜」との相違点は、かつて「萩の舎」で二円の金が紛失——その嫌疑が一葉に向けられたという苦い体験、一方、母がその昔乳母奉公をしていた稻葉家の落魄、さらに次兄虎之助の放蕩：加えて西鶴の影響等——いってみれば一葉が、はじめ己れの生々しい体験と、ある切実なる願望を底流させながら、金銭をめぐる現実社会の人間像を写実的に描いた第一作といってよい点にあろう。

ところで、この「大つごもり」の「めざまし草」(明治二十九年二月)評は、決して好評とはいえなかつた。むしろ、「…この作者のものとしては、優れたる際には非ざるべし。」といったものであつた。これは、「めざまし草」の評中でも、「…お峰が禍みを見て、その罪を掩はんとやしけむ、後の事しりたや。一葉の旧稿にて、こたび新に修正せしものなりとぞ…」とあるように、いわゆる結末の部分の曖昧さ…つまり、「すぐれた社会小説になるべき筈の素材を人情小説…」に(和田芳恵氏)になつてしまつた点と、いま一つは、「めざまし草」評がやはり明治二十九年二月という時点であること、換言すると、一葉

の他の作品——すなわち、「文学界」に分載された「たけくらべ」、あるいは「にぎりえ」、「十三夜」等との対比的関係も内在していたことも考えられる。さて、ところで従来もこの「石之助」の行為を「偶然」の結果とみるか、それとも「好意」とみるかで諸説は分かれていたことも確かである。この諸説については、松坂俊夫氏が「樋口一葉研究」(教育出版センター、昭和45・9)で詳しく紹介しており、さらに次のように分類整理している。① 石之助が承知したことらしい、という推定。② 石之助にお峰の罪をおしつけたという考え方。

③ 偶然の結果がお峰の罪を救つたとする意見…に「ほぼ大別」できるとした上で、氏は、「①の説にもつとも左袒するが、いずれもその解釈は誤解」であり、「少なくとも不十分…」として、「問題は、お峰の罪を作者が、石之助におしつけることによって結末をつけたのでもなく、ましてや偶然の結果、お峰は救われるのでもないところにある…」点を強調、さらに登場人物を、お峰とその親代わりである伯父一家と、それにお峰の奉公先である山村家人間とを、貧富という外形的世界と人間性という内的視点からこれを照射——そして特にそれらの人物像の中で、山村家の放蕩息子である石之助の位置づけを重視する。すなわち、「彼は一見山村家、つまり富める世界の住人のようではあるが、実は、両者のどちらの世界にも属さない中間者としての位置…」というよりむしろ、「山村家——富める世界への反逆者」として

描かれているとし、したがって石之助は、「山村家の総領息子であるが、母が違うので父親の愛も薄い…」と、いわゆる家庭環境からくる性格形成や人間像の因を説きながら、放蕩は放蕩でも、「家の所得が去年の倍になったことを聞知つて」、けつきょく、「『伊皿子あたりの貧乏人を喜ばす…』石之助であることを注視する。だから、「お峰」の行為については、「万事承知でやつた…」ことを断定しつつ、一葉は、「大つごもり」の中で、「お峰という心やさしい女性をえがくと同時に、石之助を通して、貧富の差への秘かな抵抗と抗議をえがこうとしている…。」としての論を確立している。

また、最近、前田愛氏が、△『大つごもり』の構造▽（「文学」昭和49・5）で詳細な分析を行っている。氏は、まず、「大つごもり」の書き出しの妙を指摘、これまで一葉の作品に多く見られた、「源氏的」なものや、「伊勢的」なものとは、およそ異質なものとして見、さらに「西鶴的」世界という従來說を、今度は作品構造という視点から把え、「大つごもり」の冒頭にみられる、「綱の長さ十二尋」、「勝手は北むき」、「師走の空のから風」などの語句は、主人公お峰の置かれていた、「苛酷な労働のありよう」を、「直截に指示示す情報」とし、お峰を断涯絶壁に立たしめた「一円」の金の重みを説く。そして、「このぬきさしならぬ金銭の量によって規定されている『大つごもり』は、あらかじめ『量』と『物』の輪郭を鮮明に具えた世界として立ちあらわねばならない…」し、また、「一葉の西鶴へのかかわり方も、まずこの金銭の主題をめぐって解きほぐさなければならなかつたはずだ…」と鋭く論じていく。したがって、「大つごもり」の構造の核心は、「山村家とお峰一家が織りなすさまざまな人間関係を、たえず非情な流通手段にすぎない金銭の量に置換し、意味づけて行く道程に求められるのである」と強調、そして、その延長線上に立つて作品構造を分析整除しつつ、さらに当時の「貴女の栄」に盛られる「明治の理想」とさ

れる主婦像」から、山村家の内儀を照射、その上で「貧富の対照図」からくる「山村家の頽廃と安兵衛一家の善良さ」という図式に単純化し、一葉の発想の類型性を云々するにとどまるならば、それは『大つごもり』の炎所を見のがしてしまったことになるし、ひいては、「模範的な奉公人であるお峰が主家を裏切つて盜みの罪を犯してしまうアイロニイの意味がアイマイになる…」と指摘する。そうして、さらに「大つごもり」には、いま一つの視座の確立がなされなければならないと説く。それは、「お峰の救済者であり、『大つごもり』の世界総体への批判者でもある石之助の位置づけにアイマイさを残したことは、あきらかに一葉の誤算」であるが、しかし、「この誤算にもかかわらず、私たちの物語がもう一つの次元に向けて開かれている…」点を衝く。では氏のいうもう一つの「意味」とは何か。氏はここでフランス人の人類学者M・モースの「贈与論」と、G・バタイユの「与えることが力を獲得することであり、蓄積された富の軽視によって生の豊かさがもたらされる」という「逆説的論理」から「石之助」の行為を照射した点である。すなわち、「去歳にくらべて長屋もふゑたり、所得は倍」という実績をあげた山村家の蓄積の論理は、『伊皿子あたりの貧乏人を喜ば』せるために正月の饗宴を用意する石之助の贈与の論理によつて侮蔑され、冷笑されることになるし、さらに「石之助のいま一つの役割としては、彼の「浪費と蕩尽は、『正直律義』の欺瞞のもとに弱者を抑圧してはばからぬ山村家の贖罪を代行していく」点であるとする。一方、「『正直は我身の守り』と自戒するお峰は、『正直律義を真向に』立てる『大旦那』の欺瞞にからめとられていた」が、「盗みの行為によつてお峰がこの欺瞞から自由になつた一瞬に、強請の好機を待ちかまえていた石之助とのひそかな共犯関係が成立する」…したがって、「山村家の『正直律義』をうらぎるこのふたりの犯罪行為から引き出された金は、『伊皿子あたりの貧乏人』を

歓ばす饗宴の資金に、安兵衛一家のささやかな新年の祝いに、それぞれあてられる」と述べている。

したがって、以上のようないくつかの視点から氏は、「掛硯にのこされた『受取一通』が、石之助からお峰にあてた『賢者の贈物』であつた」とし、結局、「大つごもり」は、「金錢をめぐる抑圧と解放のドラマ」と結ぶのである。

二

以上、「大つごもり」の同時代評の一部と、その後の評価の足跡を辿り、さらに最近の卓説ともいえる松坂、前田両氏の論を中心に紹介してきた。しかし、それらの諸説を狭い視点から把握し得ない責は免がれないが、とにかく私は先学の示唆の延長線上において、本稿のねらいである「大つごもり」の結びの部分—すなわち、せっぱつまつたお峰の行為を、「…見し人なしと思へるは愚かや…」と、さらにその結末の部分である「…後の事しりたや」に視点をおいて、これをはじめに問題提起したように、一葉自身の原体験を中心いて、作品成立の背景からこれを分析し、再検討を試みたいと思う。なぜなら、この「大つごもり」の結びの要領こそ、一葉後期文学のやや定着したといつてよい作品形態であり、また、このような余韻を残す手法の中にこそ、一葉文学の特殊性の一端が秘められていると思うからである。

ところで「大つごもり」は、明治二十七年十二月三十日刊の「文学界」第二十四号に掲載された。その後、一葉の手によって用字・用語・句読点などについて若干修正が加えられ、明治二十九年二月刊の「太陽」（博文館）第二卷第三号に再掲載されたことも周知の通りである。しかし、この作品の執筆経過については一葉の日記がこの間、欠けているので明確化はいささか困難であるが、明治二十七年十一月二十三日付の星野天知からの書簡に、「此闇夜の舌鋒くだけざる内来

年始め売出すべき次号へ何か新もの御考案被下度…」云々および、同年十二月四日付の平田禿木からの書簡にも、「闇夜」に引つづいて、「…何か御認めの程偏にねがい上候…」といった具合に、「大つごもり」と思はしき原稿の依頼と考えられるもの、さらに同年十二月二十日の戸川秋骨からのはがきに、「…いつもながら面白く拝読仕候…」と「大つごもり」の原稿受領と思われるもの、また翌年一月二十八日付の天知から（「天知_内」とあるので夫人の代筆）、「…闇夜大つごもりと引続き御面倒願候…」とある点などから考え合わせてみても、この作品は明治二十七年十二月十九日までに脱稿したと推定して間違いない。してみると、この明治二十七年末における一葉の経済生活と精神生活はどのようなものであったのであろうか。「大つごもり」は既に触れたように、一葉の生々しい原体験の作品化であり、また、当時の一葉の意識構造が陰に陽に作品に投影されている事実を考え合わせ特にこの作品の終極の部分こそ一葉の屈折し交錯した悲痛な精神構造そのものであったと考えざるを得ない。

明治二十七年五月一日、一葉は十か月の生活であった大音寺前をたたんで丸山福山町に転居した。私は先にこれを「背水の陣」と表現した。では、この「背水の陣」とは何か、まず、第一に「文学界」の影響をあげ得よう。ところで、この問題については松坂俊夫氏が、「嚴肅に人生と芸術を考えていた『文学界』一派に代表せられた、時代の若き思想が作家一葉に及ぼした影響はけつして少ないものとは思われない。」（「樋口一葉研究—大つごもり論」）と勝本清一郎氏の「一葉^(註2)われは女成りけるものを」の一部を紹介しながら論じているし、和田芳恵氏、村松定孝氏も「文学界」との影響関係は論じている。たしかに、「人つねの産なければ常のこゝろなし、手をふところにして、月花にあくがれぬとも、塩壼なくして、天寿を終らるべきものならず、かつ文学は糊口の為となすべき物ならず、おもひの馳するまゝ、こゝ

ろの趣くまゝにこそ筆を取らめ…」（明治27・7）といつてゐるよう
に、芸術至上主義的発想からくる想念が、生活と芸術との一元化の困
難を自覚させたことも事実であるが、いま一つ注目しなければならな
いのは、いわゆる「出世払い…」という処世術をも同時に学んだので
はなかろうか。論が飛躍するが、（後で詳述する）例えば久佐賀義孝と
の交渉経過の中で、「私成業の暁までふみ行道を助け給はずや…」と、
一応は、「歌門」を開きたいという可能性を意味する計画を久佐賀に
提示、その経済的援助を期待した点。しかし、一葉の真意は「歌門」
ではなく、「小説」を通していわゆる「大作」をものすにあつたの
ではなかつたか。たしかに、一葉は、明治二十七年二月一日、師の
中島歌子を訪れ、「…三宅竜子ぬし、家門を起し給ふこゝろのよし。」
と花圃の歌門の独立を歌子から聞き、さらに、「師は、我れにもせち
にすゝめ給ふ…」と勧奨され、さらに二月二十五日、平田禿木が來
訪した折、彼から、「女学雑誌に、田辺竜子、鳥尾ひろ子の、ならべ
て家門を開く」との話を耳にし、「万感むねにせまりて、今宵はねぶ
ること難し。」と日記に書き記るさねばならぬ一葉ではあつた。そし
て、この追いつめられた一葉の心境も事実であつたに相違ない。しか
し、「精神的ブルジョア」ともいえる一葉のプライドは能力的には人
一倍自負を持つだけに先の同門の仲間と同じく「歌門」で事足れり：
とするとは思われない。同門の連中を乗り越えていかねばならぬもの
—しかも人生の“余技”としてではなく、人生の現実を、社会の矛盾
を真正面から相渉らうとするもの—「社会変革への去向」（助川徳是
氏「お力の思ひ」近代日本文学会九州支部会報）を実現させ得るもの
—それは「小説」を通して“大作”をものする…これが一葉の“夢”
であり意地ではなかつたか。したがつて「歌門」はその方便に過ぎな
かつたとみるのは余りにも牽強附会というべきであらうか。
ところでいま一つの視点であるが、一葉は日清戦争という、日本が

少なくとも外国と戦いを交えるという最初の国家的危機とも言えるこの大事件に対しても敏感に反応し、同時に国家・民族という大局的視点から己れの行為を正当化するヒロイズムにも似たものが底流してい
たことを否定できないのではなかろうか。明治二十七年七月二十四日
の新聞各紙に、「東学党の暴動全鮮に拡大」とあり、日清戦争前夜の
暗雲急を告げる社会状勢下にあることは想像することに吝ではない。
因みに明治二十七年六月二十日の日記に、「午後二時、俄然大震あり
…」とこの日襲つた大地震の記録の後に、「…この頃の事、すべて書
尽しがたし。朝鮮東学党の騒動、我国よりの出兵、清国との争端、こ
れらは女子の得よくしるべき事にもあらず：かつは此頃打つき心せ
わしきに、その日の事をその日にしたゝめあへねば、やがて散らせぬ
るも多かり…」とあり、女性の身なるが故に詳しくは解らぬがと断わ
りつつもやはりある種の危機感にも似た感情の醸成を裏付けてゐる。

三

明治二十七年三月と推定される「いはでもの記」の中に一葉は、次
のようにしたためた。「中々におもふ事はすてがたく、我が身はかよ
わし。人になさけなければ、黄金なくして世にふるたつきなし、すめ
る家は追はれなんとす。食とぼしければ、こゝろつかれて、筆はもて
ども夢にいる日のみなり。かくていかさまにならんとすらん。死せる
かばねは、犬のゑじきに成りて、あがぬ名をば野外にさらしつ。千年
の後、万年の春秋、何をしるしに此世にとゞむべき。岡辺のまつの風
にうらむは、同じたぐひの人の末か、わびし…」（傍点稿者）と、ま
さしく極限状況に立たされた一葉の悲痛な叫びを聞く。一葉は一方で
は“大望”を抱きながらも、しかし現実の問題は如何とも為し難い。
しかもここに何んとしても避けて通ることのできない巨大な現実が一
葉の眼前に聳立している。一葉はふたたび「塵中につ記」（明治27・3

・19の余白?)に悲愴な決意を示さねばならなかつた。すなわち「おもひたつことあり。うたふらく」としながら、「すきかへす人こそなけれ敷嶋のうたのあらす田あれにしあれを」と歌い、さらにつづけて「いでや、あれにあれしは敷嶋のうた斗か。道徳す、たれて人情かみの如くうすく、朝野の人士、私利をこれ事として国是の道を講ずるものなく、世はいかさまにならんとすらん。かひなき女子の、何事を思ひ立たりとも及ぶまじきをしれど、われは一日の安きをむさぼりて、百世の憂を念とせざるものならず。かすか成といへども、人の一心を備へたるものが、我身一代の諸欲を残りなくこれになげ入れて、死生いとはず、天地の法にしたがひて働くとする時、大丈夫も愚人も、男も女も、何のけじめか有るべき。笑ふものは笑へ、そしるものはそしれ、わが心はすでに天地とひとつに成ぬ。わがこゝろざしは国家の大本にあり。わがかばねは野外にすてられて、やせ犬のゑじきに成らんと期す。われつとむるといへども、賞をまたず、労するといへども、むくひを望まねば、前後せばまらず、左右ひろがるべし。いでさらば、分厘のあらそひに此一身をつながるべからず。去就は風の前の塵にひとし。心をいたむる事かはと、此あきなひのみせをとぢんとす」(傍点稿者)と…。いさか引用の長すぎたきらいがあるが、しかし、反面、一葉の慟哭にも似た苦惱の迫真性をじかに読みとることができよう。では一葉はこれによつて“転進”的端緒を得つたであろうか。

しかし、一葉の以上のような個にして孤なる極限状況に、さらに追い打ちをかけたのが一葉の母であり妹であった。もちろんこれはいまさら始まつたことではないが、それでも起死回生に喘ぐ一葉に対し、本来ならばこれが最もよき理解者であり、協力者でなければならぬはずのものが、事実は全く逆の結果であつてみれば、事は深刻である。すなわち、「国子はものにたえしのぶの氣象とぼし。この分厘い

たくあきたる比^{ころ}とて、前後の慮なく、やめにせばやとひたすらすゝむ。母君も、かく塵の中にうごめき居らんよりは、小さしといへども門構への家に入り、やはらかき衣類にてもかさねまほしき願ひなり。さらば、わがもとのこゝろはしるやしらずや、兩人ともにすゝむる事せつ也…。」と、「親の心を子が知らず」のまさしく逆現象である。しかも、この果てることのない“内憂外患”肉親の“造反”的一面と参^{さん}という“亡靈”がいまなお存在している事実である。「小さしとして、特に注目せねばならぬことは、母親の愚痴の中に潜む“旗本直参”という“亡靈”がいまなお存在している事実である。「小さしといへども門構への家…」への期待は、とりもなおさず、これは、かつての“士族”を顯示する人間「多喜」の悲しき性^{さが}である。しかし、反面また、視点を換えてこの事を照射して見る時、武家政治が崩壊してすでに三十年近くなるうとする時点にあつてもなおも母多喜が、過去憧憬の虜になつて現実に背を向けるのは、一葉の両親が安政四年に郷里を出奔し、父は丁稚奉公、母は長女ふじを里子にして稻葉家の乳母奉公・文字通り苦節十年、粒々辛苦の末、贋の家系図まで作成して南町奉行配下同心浅井竹藏と養子縁組みし、武士の株を三百八十三両余で買収、待望の武士になつたものの、しかし、その年の十月十四日、徳川幕府は崩壊——一葉の両親にとつてはまさに槿花一朝の夢と化しただけに、母多喜にとつては払拭しようにも払拭し切れぬ強力な幻影であつたはずである。そして、また、この時期は、日清戦争その前夜ともいべき社会状勢であつてみれば、士族意識が陰に陽に蘇みがえつて、多喜の心を揺さぶつたことも否定できないのではあるまいか。そして、ひいては、この“亡靈”が一葉の生涯を直接、間接に脅びやかしていたことも見逃すことができないと思うのである。

四

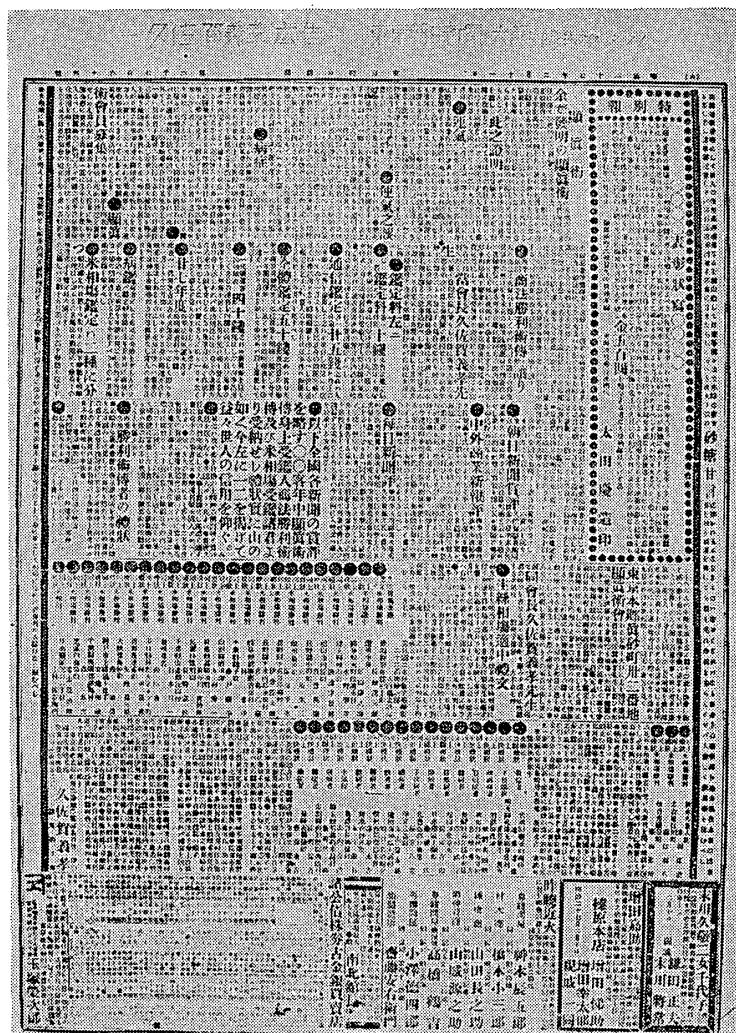
ところで、以上述べてきたように、一葉の“転進”を阻む諸々の障

害の解決点は一体何か。答はまことに簡潔そのもの：ただ一つ、経済生活の安定：この一事にすべてが集約されるのである。だが実態は「年比うり尽し、かり尽しぬる後の事とて、此みせをとぢぬるのち、何方より一銭の入金もあるまじきをおもへばここに思慮をめぐらさざるべからず：」と、悲嘆にくれる一葉であつてみれば、残された方策：これもただ一つ：一葉の苦境を理解し、『大望』に共鳴する、いわゆる『出世払い』を可能ならしむる後援者の探索：一葉の目下の急務はこの一事に注がれねばならなかつたはずである。これ以上の『背水の陣』が現実に存在するであろうか。

明治二十七年二月二日、一葉は年始に出た。しかしながら着物はといえば「塵ほども残らずよその蔵にあづけたれば、仮そめに出んとするもの」もなく、「邦子の、からうじて背中と前袖をゑりさまゝにはぎ合せて、羽をりだにきたましかば、ふとは、はぎ物とも覚えざる様に小袖一かさねこしらへ出たり。これをきて出るに、風ふくごとの心づかひ、ものに似ず。寒風おもてをうちて寒さ堪がたき時ぞともなく、冷汗のみ出る：」思いの一葉であつた。しかも年始は表面のことであつて、その内実は金策が主目的であったのである。

さて、この二月二日の日記で注目しなければならないのは、西村鉄之助に対する一葉の態度である。西村鉄之助というのは、樋口家とは親戚同様のつき合いをしていた人で、小石川表町六で文房具と洋品を売る「礫川堂」を営んでおり、鉄之助の両親である信夫（しのぶ）と「きく」の媒妁は一葉の両親であったという。（和田芳恵氏の調査による）。八方塞がつた一葉は、この西村を度々借金の対象としていたが、その西村に対する一葉は、「かの西村が、少なからぬ身代にはらふくるゝを、五円十円の金を出させなば、いつにも成ぬべし。我はもとより、こびへつらひて人の恵みをうけんとにはあらず。いやならばよせかし。よをくれ竹の二つわりに、さら／＼といふてのくべきの

みとおもふ：」と、大変な啖呵の切りようであると同時に、意地つぱりとプライドの強い一葉の赤裸な姿をかい間見る思いである。この西村に対するは、すでに大音寺前転居の直後である明治二十六年七月二十五日にも同様な記録がみられる。つまり、一葉はこの大音寺前に隠れるようにして転居、そして開店準備のためこの西村へ金策を求めたものの断られた。その日記の一部であるが、「彼ほどの家に五円、十円の金なき筈はあらず。よし家にあらずとて、友もあり、知人もあり。男の身の、なさんとならば成らぬべきかは、殊に、母君のかしら下ぐる斗にの給ひけるをや。とざまかうざまにおもへど、かれは正しく我れに仇せんとなるべし。よし仇せんとならばあくまでせよ。樋口の家に二人残りける娘の、あはれ骨なしか、はらはたなしか。道の前には羊にも成るべし、仇ときゝて、うしろを見すべき我にもあらず、虚無のうきよに、好死處あれば事たれり。何ぞや、鉄之助風情が前にかしらを下ぐべきかは：」。大変な剣幕である。和田芳恵氏も指摘しているが、このよくな一葉の態度は、「これまで姿を見せなかつたが、この一葉がほんとうの一葉だと思わなければならない」（一葉の日記）とは、まさしく正鶴を得たことばとして容認せざるを得ない。だが、今度は以前とはいささか事情が異なるのである。進退極まった一葉の現時の状況はおよそ前回の比ではない事は確かである。ところで西村鉄之助に対し、内心憤満やるせない感情を吐き出した二月二日から二月十七日までの日記は空白である。何故の空白か。一葉の日記の空白、中断は決して事新しいわけではないが、ただ、この間の空白は特別の意味を語ると見なければならないのではなかろうか。つまり、既に問題を提起したように、是が非でも経済的後援者を探さねばならぬ：その一葉の煩悶の日々がこの日記の空白を通して如実に語りかけてくるのではなかろうか。そして一葉は遂にその対象を探りあてた。それは明治二十七年二月十一日「東京朝日」の六面ほとんど全段



(明治27. 2. 11 付 東京朝日 第6面 久佐賀義孝広告)

といつてもよいくらいな観相家久佐賀義孝の信憑性に富むみごとな広告である。これは他の観相家、例えは観理学会本部長権大教正佐藤觀元（明治27・1・1「時事新報」）同27・1・15「東京朝日」。同じく觀相家・大教正木嶋大照斎の広告（同年1・13「東京朝日」）の比では全くない。この問題については拙稿「後期一葉文学の一侧面—久佐賀義孝問題の再検討—藤女子大学国文学雑誌、第十三号）で一部触れたので重複を避けなければならぬが、本稿に關係するところを一部紹介すると、まず三段抜で「特別報」とタイトルして、「米相場」適中により、相場仲間と思われる「東海道筋聯合連総代 太田慶造」から、「頭

真術会本部長久佐賀義孝殿」宛の「表彰状」「写し」がにぎにぎしく掲載され、その内容も「（略）引続き今日まで連戦大勝の結果を見しは蓋し生等が先生の妙術を信じ忍ぶべからざる危険を耐忍せしとは云ひ乍ら亦偏に先生の先見に卓絶なる殊に其指揮の玄妙なるに拠らずんば何ぞや此の大勝を得ぐんや爰に於てか生等聯合の本日此の新年会にて決定の上聊か先生の偏功を表彰せんと欲し金五百円を贈呈する者なり受納賜はらば幸甚」とあり、日付も明治二十七年一月五日となつてゐる。しかも、「金五百円」は他の活字の何倍もの大きさで、いやが上にも人目に触れるものである。つづいて、「顕真術」の紹介がながながとある。その一部を抜萃すると、例えは、「余が發明の顕真術は天地四季の活動變化妙用法に拠つて物体物質に關係ある系線引力の盛衰氣候正變數理の出没等によりして人体幽明の事柄は勿論苟も宇宙万物有機無機上凡て最初の起因を求め未前の結果過去の状況現在の如何を瞭然火を見る如く顕真する一大奇術にして彼旧来より有り触れたる九星易学五行占考墨色觀相の如き當るも八卦当らぬも八卦と云ふ如き判断的の曖昧物と同視なからんことを蓋し此之証明は府下各新聞の賞評又各実験者が夫々府下各新聞に我術力の不思議と其効の状況を掲載受けしに付ても明瞭なれば更に弁明せず」云々と、以後一五〇〇字に及ぶ解説があり、さらに「鑑定料」を示し、ついで、各新聞評（「東京朝日」、「中外商業新報」、「毎日新聞」）を列挙、はたまた全国各地からの礼状を掲載、特に、米相場適中者からの礼状は、「千八百三十有余名余白なきに付為に略す」としつつも、二十五名の住所氏名を、さらに難病全治者の礼状これまた「四百六十余名あれども余白なきを以て略す」としながらも十六名の住所氏名とその病名をにぎにぎしく

書き並べてある。

特に一葉が注目したであろう点は、まず第一に先の表彰状に添えての「金五百円」の贈呈であろう。一葉一家が大音寺前に転居し、荒物屋兼駄菓子屋を開業した当初の商品—全部で五円…それ以前の主たる収入源であった洗濯や縫物は、ひとえ物の縫い賃七錢、洗濯は冬物五錢、夏物二、三錢が相場であり、一葉一家の生活費が一ヶ月約七円くらい—これは一葉が借金する時、きまつて七円か十五円、十五円は二ヶ月の生活費と考えられるし、また明治二十七年四月、師の中島歌子に「萩の舎」の助教に—ということで月額手当が二円…どの視点から考えてみても、「五百円」の謝礼は一葉の心を迷わせ、誘い得るのには充分のものであったはずである。第二点、前記新聞評中、特に「中外商業新報」評はこれまた魅力あるものであった。それは、「：

四季活用商法勝利術伝秘書久佐賀義孝氏は年少より天文学に志し遂に支那印度に渡航し数年の難行苦行を経て其蘊奥を究め帰朝して天啓顕真術と称し本部を東京に置て世人の需に応じ其術を行ひしに一旦倒産せし家をも忽ち回復し九死一生の病人も忽ち平癒するが如き神妙不思議の結果を現はせしは兼て聞知する処なるが今度又四季活動商法勝利伝秘書を世に公にするに至れり左れば氏の御蔭にて相場師の如きは損するの患なく大利のみ博するに至るべく實に氏の如きは神なるべし只人にあらざるべし…」（傍点稿者）なることばに至つては、まさしく九死に一生をねがう一葉にとっては、これに心を傾けないとしたらむしろ不自然とさえいい得るであろう。いま一つの点であるが、この広告には、外人評まで載せて周到さには驚異のほかはない。すなわち、「…英國人ボース氏よりは、貴会久佐賀氏の発明術にして人事上実験せし處悉く適す實に奇中の奇術書…」云々、そのほか、「横浜居留米国人ブルヘート氏よりは、余の友人の依頼により客年十二月貴会長久佐賀師に横浜合益会に挙行するに当たり鑑番号の鑑定を請求せし

に其後久佐賀師は一月第二土曜日に開会せる一千円の当りは総数五千の内三千二百二十三号なりとの鑑定書を送られたるに果して同番号に当籤したり實に其奇なる顕真術に驚けり余は師の為め不日我国に帰り顕真術の吹聴者たらんとを誓ふ云々…」時まさに外来文化一辺倒に近い世相であつただけに、このような“國際的”評価を思わせる広告は心にくい配慮ともいえよう。

以上のように一葉をして惹きつけるに吝でない久佐賀の広告内容は枚挙に暇がない。だが、一葉が、「久佐賀はまさご丁に居して、天啓顕真術をもて世に高名なる人なり。うき世に捨てものゝ一身を、何処の流にを投げこむべき。学あり、力あり、金力ある人によりて、おもしろく、をかしく、さわやかに、いさましく世のあら波をこぎ渡らんとて、もとより見も知らざる人の、ちかづきにて引合わする人もなければ、我れよりこれを訪はんとて也…」（明治27.2.23）と「秋月」と偽名を使って単身乗り込ませたもう一つの理由は、やはりこの広告の中に盛られている「顕真術会員募集」の一項目もその一因と考えられる。それは、「内外貴紳士贊助を得我会務を拡張し此術の効能を実験せしめん為左記の顕真術を今回の入会者に無料で催し全般に普及す…」云々であったとみることができるのでなかろうか。久佐賀の「会務拡張」、「今回の入会者に無料…」まさしく一葉にとって時宜を得たものと思われる。

以上のように久佐賀の“魅力”に惹かれた一葉は、これから以後、時には久佐賀から「体を交換条件に…」まで要求されつつ、一應は「しれもの…」と憤怒しながらも約一年有余、接触をつづけていく理由も自ずと首肯できるというものである。

なお、久佐賀との交渉経過ならびに、この久佐賀像が「にぎりえ」の結城…特に「無題二十二」に示される「結城正雄」像への投影…ということについては、先に示した拙稿「後期一葉文学の一侧面—久佐

賀義孝問題の再検討——である程度触れたので、ここでは重複を避けねばならぬが、特に、「大つごもり」の構想そして執筆時期に呼応するものとして是非触れたいことは、一葉は久佐賀に対して「千円」という破格の借金を申し込み、「：さりとて此金子頂戴致度と申すのでなく唯一時押借のかなひ候はんかやがて御相談の上何かおもしろき事の目当たりし時、倍になしてたしかに返上致すべく、私は女なれども御はなしの上の片腕にも成るつもりもこれあり候決して決して御遠慮なくおもふ事もさせてをかしき事よの中について御（二字が不明）など守れとなれば隨分人にはもらさぬ私に御座候：」と意味深長な手紙を書かざるを得ないところまで追い詰められていた事実である。

五

さて、以上のように、久佐賀に対する一葉は、まさしく“精神的娼婦”ともいえるものであつたわけであるが、しかし、反面、そこには断涯絶壁に立たされて必死の思いに跪き苦しんでいる一葉の姿を目のあたりに見る思いである。そしてさらに、追い打ちをかけたのが、先学が既に説くいわゆる「幸作事件」であろう。明治二十七年七月一日の日記に、「…十時頃成けん、桜木丁より使来り、幸作死去の報あり。母君驚愕、直に参らる。からはその日寺に送りて、日ぐらしの烟とたのぼらせぬ。浅まじき終を、ちかき人にみる、我身の宿世もそぞろにかなし。」そして翌二日、「早朝、母君およびおくらと共に、日ぐらしに骨ひろひにゆく。山川程を隔てたる叔甥のおなじ所の烟とのぼるは、こも、のがれぬ宿縁なるべきにや：」がすなわちそれである。この幸作の死は一葉にとっては、極めて衝撃的であったはずである。周知の通り、長兄泉太郎病死、つづく父の死、そしてこの度は「山川程を隔てた」山梨県にいた従兄の幸作までも同じ病氣で死んでいく。一葉は時々刻々とわが身に迫り来る運命に思いを及ぼし、この「のがれぬ宿縁」に思わず、「我身の宿世もそぞろに悲し…」と悲痛な慟哭を吐き出さざるを得なかつたのである。

ところで一葉は、すでにこの年の五月一日、丸山福山町に転居していた。住居は母の期待に応え庭付（ただし隣の）の月三円の家賃一船は港を既に出航してしまつたのである。そしてもどるべき母港は一葉には存在しなかつたのである。しかし、久佐賀の態度は煮えきらない」というより、一葉が諸々のものを天秤にかけているからである。「秋のはじめさまゞゝのこと多く、されど一錢の入金もなく、せんかたつきて（人名抹消）をたのまんと恥をしのびてゆきたるなれど、なにのかひとてなかりし。ただ／＼これは生涯の恥なりし。」とあり、十一月十日の日記にも、「けふは、なみ六のもとより金かりる約束ありけり。九月の末よりたのみつかはし置しに、種々かしこにさしさわる事多き折柄にて、けふまで成ぬ。（中略）家は今日此頃窮はなはだし、くに子は立腹、母君の愚痴など、今更ながら心ぐるしきはこれ也：」と記されているのをみて、一葉の窒息現象を想像するに吝ではない。和田芳恵氏は、「一葉の日記」で、「萩の舎、小出繁に対しても小説で立とうと見せ、小説では、『文学界』と桃水をあやつり、金を引出すには、久佐賀や西村をせりあいさせ、その中心に自分がすわって、勢力の均衡と傾きを計算していたことになる。そういう一葉は、生活のしたたかものと言えるだらう：」と手ぎびしく指摘しているが、結果としてはたしかにその通りであつて間然する所はさらにならないが、私は当時の這般の状況を総合的にみる時、一葉にはそこまでの余裕は無かつたと思われる。一葉後期の作品のどの部分をめくつてみても、そこには息づまる人間が迫真性をもつて訴えてくるのは、何んとしても一葉の現実そのものの人生が行間ににじみでていてるからではあるまいか。なお、先に引用した一葉の日記の一節にみられる、借金の対象の伏字——しかもこれが「ただ／＼：生涯の恥：」といつてあるこ

とについて、和田芳恵氏は、いろいろ疑問をさしはさみながらも浪六^(注4)もその一人であったが、久佐賀義孝であらうかと考えられる」（「一葉の日記」に対し、拙稿「後期一葉文学の一侧面——久佐賀義孝問題の再検討」）では、「桃水説」を述べたが、いまもその考えは変わらない。久佐賀はかなりビジネス的な面があるが、一葉にとって桃水は「永遠に心の支え」であったからである。それであるからこそ、鶴田たみ子事件にしても、桃水再婚説にしてもこれを糾明し得ない“女性”としての一葉の“悲しき性（さが）”があり、また逆にそこに“人間”一葉の姿があつたのではなかろうか。

六

以上、「大つごもり」制作の背景を諸々の視点から考察してきたのであるが、あの「大つごもり」に描かれる“お峰”像こそ、実は偽らざる一葉の生々しい投影と断じて憚らない。「受宿の老嫗」から、「いやになつたら私のところまで端書一枚、こまかきことはいらず、他所の口を探せ……」といわれながらも、よしんばそれが「鬼の主」であつても「勤め大事に骨さへ折らばお気に入らぬこともなきはず。」と、すでに一步も後退することが許されぬお峰の自戒は、即一葉の現実そのものでもあつたし、さらに、お峰の育ての親、安兵衛一家の、外形描写としては母がかつて乳母奉公した稻葉家の落魄ぶりにもつながるが、そこに流れる心理描写こそ一葉一家でなくては何んであつたろう。既にその背景の一側面として、一葉の母と妹のことは述べてきたように、一葉は肉身の中にはあってさえ、個にして孤であった。安兵衛がお峰に期待した借金の、「三月の延期」のための一円五十銭はわかるとしても、あとの五十銭は「かくい^(注5)はば欲に似たれど」と断わりつつも、その実は、「大道餅買^うてなり^{のべ}三カ日^(注6)の雑煮に箸を持たせねば出世前の三之助に親のある甲斐もなし。」であつてみれば、これはやはり母と

妹の「愚痴」の延長線上にあるものではなかつたか。しかし、それへの非難は第三者の理屈であつて、事、肉身に関することであれば、避けて通ることのできない人生の宿業である。したがつて一葉にとつては何が何んでも渡り切らねばならぬ一本の丸木橋であつたのである。

ところで、再び、作品に視線を移すと、お峰の最後の機会であつた山村家の「御新造」は、けんもほろろ、その上、嫁いだ娘の「初産」のための迎え車で、あたふたと出かけてしまう。一方、お峰の苦悩を知るよしもない従弟の三之助がその金を受け取りに勝手口からやつてくる。しかも、山村家の「旦那様」、「御新造」への謝辞の伝言まで用意して一進退極まつたお峰に残されたただ一つの手段——それを実行することを余儀される時がきた。「拝みまする神さま仏さま、私は悪人になりまする。なりたうはなけれどならねばなりませぬ。罰をお當てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬことなればお免しなされませ。もつたいなけれどこの金ぬすませてくだされ……」と、「懸け硯」の引き出しにある札束を心に描きながら、「内外^(注7)を見回せば、「嬢さまがたは庭に出て追羽子に余念なく、小僧どのはまだお使ひより帰らず、お針は二階にてしかも壘^(注8)：若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の真最中……」あとは、「かねて見しおきし硯の引き出しより、束のうちをただ二枚、つかみしのちは夢とも現とも知らず」、無我夢中で三之助に渡してしまお峰であったのである。しかし、その後で一葉は、なぜ、このお峰の行為を、「見し人なしと思へるは愚かや……」と、結んだのであらうか。この点に関する諸説は一部既に紹介してきただが、たしかに諸家^(注9)が説くように、これが終末の部分の伏線であることは論を俟たないが、私は、一葉の現実生活の反映として、どうしてもこのように描かざるを得なかつた苦惱に力点を置きたい。つまり、己れの分身であるお峰への哀憐の情とでもいえる何か居たたまれないもの——そんな潜在意識を否定できないのではなかろうか。そして、そ

れがやがて結末の部分において、「引き出しの分も拝借致し候石之助」なる紙切れ一通によってお峰は一応は救済されることになるわけであるが、これも先学が説くように、一葉の切なる願望であることもいまさら言うまでもないが、では、「後の事しりたや」の「後の事」とは一体何であったのか。

さて、ここで「石之助」を考えてみると、彼は山村家の放蕩息子であると同時に、総領息子であることも事実である。しかし、その内実は、「夜中に車を飛ばして車町の破落戸がもとをたたき起こし、『それ酒買へ着。』と、紙入れの底をはたき無理をとほすが道楽』であったり、「伊皿子あたりの貧乏人」に金をばらまく「仁狭」的行為に及ぶ石之助でもある。したがって、そのような石之助であり、しかも、お峰の行為の目撃者と解されるものであつてみれば、まずこの事を揚言する気づかいはないものとみてよい。もし、そうだとするならば一葉が懸念する「後の事……」とは何を意味するのか。そこで考えられる事は、たとえ、お峰の行為が他に知れることがなくとも、お峰の「盜、み」という行為は事実であり、これは永遠に払拭し得ない問題であることもまた事実である。そして、この罪の意識は、お峰の今後の生活において何らかの意味において拘束しつづけるはずである。もしこのことが正鶴を得ているとすると、実は一葉が最も知りたかったのはそのことではなかつたか。すでに、「大つごもり」成立の背景について、様々な視点から考察してきたように、現実の一葉の経済生活は、可能な限り「借金」という形で支えられてきた。しかも、その返済の日途も立たないままに。そして、その底に流れる「借金哲学」ともいえる一つの想念は、まさしく「わがこころざしは国家の大本に」あるし、また、「……世のくだれるをなげきてここに一道の光をおこさんとこころざす我れ……」（明治27・6日記）であつて、決して苦渋に満ちた日常性からの脱出のためではないと、己れの行為を正当

化しようとしてきた。しかし、それはあくまで一葉個人の主情的な、しかも恣意的論理であつて客觀性を持つものではない事は当然である。一葉は、一方では以上のように力みつつ己れを鼓舞しながらも、ふと心の句読点として我が身を顧みる時、この罪の意識が台頭してきて一葉の良心を噴きみづけていたことも否定できないのではないか。「後の事しりたや」こそ、実は以上のような一葉自身の、生々しい心の葛藤の作品化とみるのは余りにも極論というべきであろうか。

注(1)

(1) 湯池孝氏は、「樋口一葉論」（大15・10至文堂）で、「……人物も、事件も、割合に素直に書いてあるが、終末の処は感心しない。作者は、お峰が一部分盜用した金の残りを全部石之助に持つて行かせてある。しかも御丁寧に受取りまで書かせてある。そのため、危ふくもお峰を逃して、石之助にすっかり罪を負せてある。これは、作者のお峰に対する同情から出た事であろうが、結果はかへつて甘く不徹底になつて了つた。石之助はお峰のした事を知つてその罪を着たのかどうか、前文「見し人なしと思へるは愚かや」とあるのからして、万事承知でやつた事らしい。最後にも作者は「孝の余徳は我れ知らず石之助の罪になりしか、いや／＼知りて序に被りし罪かも知れず、云々」とその事をほのめかせてゐる。」と述べ、さらに結びの形態については、「……曖昧で……何んとなく物足りない。いい加減な片付け方がしてあるので終に来てす、かと気が抜かれて了ふかの感がある。望むらくは、そんな小細工をしないで、お峰の方へ疑ひの眼を向けさせて、どこまでも彼の女を苦しめて貰ひたい。最後のくよりは難しいだろうが、その方がぐつと引締つただろう。」と述べている。

(2) 平林たい子氏「樋口一葉論」昭4・11「新潮」で、「お峰といふ女性に対する女史の同情禁じ得ない涙とそれに留り得ないでどうにかせずに居られなかつた心持——それは、盗んだ一円をうまく放蕩息子に被せたことによつて痛快に溜飲を下げた——ことであろう。」と述べ、さらには、このことは、「古い道徳に対するあはれに内氣な反抗ではない

か」と記している。

(4) 塩田良平氏「一葉作風の展開」昭和32・11「国文学」で、「…お峰という下女奉公の女が、節季に一円の金を伯父に貢がねばならぬ破目になり、内儀に頼むが断られる。思案に余って懸鏡の引出にある二十円から二円だけ盗みとるのを、この家の不孝息子といわれる生きぬ仲の石之助が、知つてか知らずてか、行きかけの駄賃として残全部を盗みとり言訳に紙一ひら「ひき出しの分も拝借致候、石之助」と書いてある。さては放蕩のしわざかとお峰には疑がからず、「さらば石之助はお峰が守り本尊なるべし、後の事しりたや」と結句にある。豊かな山村の家と落ちはふれた伯父の窮状との対照も鮮やかに、石之助のシチュエーションも巧みで、従来の空想的な世界から抜け出した現実的要素の濃い、かつ首尾整ったコントで、古典臭はなく、文は平淡で簡潔であり、こと結びは、けわしい人生に一つの息ぬきを与えたようなユーモラスな余情が漂つた。」と述べているが、「ユーモラスな余情」には疑問残る。

(5) 和田芳恵氏「大つごもり」近代文学鑑賞講座、第三巻「樋口一葉」(昭33・11、角川書店)で、「…最後の『見し人なしと思えるは愚かや。』は、ここまでで、この小説のテーマを割ることになるから失敗である。だから、この部分は書かない方が良かった。」と述べ、さらに結びの部分については、「このようない盜みを、一葉はお峰の身の上に設定しながら、結局は石之助の罪へ吸集させ、その上に、なお、孝の余徳を引きださずにはおられなかつた。こうして、すぐれた社会小説になるべき筈の素材が、人情小説に終つたのである。」と記している。また、「樋口一葉」(講談社現代新書—昭47・5)では「大つごもり」から独自の境地をひらき、「良質な鉱脈に突きあつたという氣さえする。」し、「一葉は『大つごもり』を書いて、はじめて市井事ものの作家になった。」と述べている。

(6) 村松定孝氏「評伝樋口一葉」—「大つごもり」(昭42・12、実業之日本社)「見し人なしと思えるは愚かや—とここで作者は謎の一語をつかつて、読者に、では誰かが見ていたのであろうかお峰の犯行は哀

れや露見するのではなかろうか、との危懼を抱かせる。こうした手法は一葉のこのんで用うるところ…」と述べた上で、「こうした発想上の工夫は、たしかに一葉の凡手ならざるところであり、作者のねらいはこうしたサスペンスをたくみに弄しながら文体に振幅のうねりを呼んで、その振幅のエネルギーを駆って、運びに走さをつけつつ、一息に最後のクライマックスの峯へ小説を駆けのぼらせてゆく。」と述べ、特に、「このラストの一後の事しりたやーと結んだ筆致など、まさしく心憎いまでの作法の妙といべきではないか。」と賞讃している。

(7) 福田清人氏編小野茉紗子氏「樋口一葉」一九六六年清水書院。

「お峰の上に人間の極限状態における盜みという条件を設定しながらも、それをつきつめて描かずに、石之助に救わせてしまったラストシーンは、『すぐれた社会小説になるべき筈の素材を人情小説に』(和田芳恵「樋口一葉」)してしまったといえる。せっかくの素材にもう一步のつっこみが足りなかつたのである。」と述べている。

(和田芳恵氏「樋口一葉伝」昭40・11、新潮文庫その他)

(村松定孝氏「評伝樋口一葉」昭42・12、実業之日本社)

注(3) 久佐賀義孝についてのこの部分の説明は、現在、神奈川県立図書館にある「京濱実業家名鑑」ならびに、国会図書館蔵の同書の内容とかなり符合する。その詳しい内容については、拙稿「一葉後期文学の一側面—久佐賀義孝問題の再検討」(藤女子大学国文学雑誌第十三号、昭48・3)で触れた。

注(4) 和田芳恵氏は、その後、「樋口一葉」(講談社文庫、昭47・5)で、「村上浪六であろう。」と述べている。

注(5) 注(1)で触れたので重複を避けたい。

(一九七四・一〇・III)